

けやき通りまちづくりの会

代表者	竹内魁成
所在地	〒590-0022 大阪府堺市堺区中三国ヶ丘町3-3-16
設立年月日	2001年7月
URL	http://www.sakai.zaq.ne.jp/dudmn202/KeyakiSakaiHP/

【設立趣旨】

けやき通りは、長尾街道、熊野街道、竹内街道、西高野街道に囲まれた約900mほどの並木道で、周辺には御陵・建造物・古道・寺社などが多く点在し、それら地域の歴史遺産を活かし、教育、文化の向上を目指したまちづくり活動を進めています。

【沿革】

平成12(2000)年に堺市が「けやき通り(榎・三国ヶ丘地域)の景観を活かしたまちづくり」と題して「まちづくり塾」を開催しました。塾に参加した近隣の人たちが中心となり、翌年の平成13(2001)年に「けやき通りまちづくりの会」が発足し、同会は、堺市まちづくり市民組織認定第一号となりました。

【活動目的】

けやき通りの景観と界隈の歴史遺産を活かしたまちづくり

けやき通りまちづくりの会の役員は、会長・事務局長・会計・相談役で構成されており、「花づくり・人に優しい道づくり委員会」、「地域交流委員会」、「歴史遺産活用委員会」の3部門にわかれ活動しています。

「花づくり・人に優しい道づくり委員会」では、定期的なまちの清掃・路上簡易広告物除去、けやきの根元に花を植えるなど美しいまちづくりの活動を行っています。「地域交流委員会」では、地元中学生から歌詞を公募し「けやき通りのうた」を作曲し、店舗活性化を図る特典つきショップパスポートを発行しました。そして「歴史遺産活用委員会」では、歴史遺産を通じて勉強会やイベントを開催し、参加者である地元住民の皆さんとの交流、まちの活性化を図っています。また、けやき通り周辺マップ(図1)や歴史道散策コース『三国の丘の文化遺産12史跡めぐり』を作成、JR西日本が発行する『JRふれあいハイキング』に掲載し、地域外から訪れる方々にもアプローチしています。これらの活動費や経費は、会費、寄付および助成金で賄われています。



図1 けやき通り史跡マップ

●地域のランドマーク旧天王貯水池

旧天王貯水池(図2)は、明治43(1910)年に建設された水道施設で、昭和39(1964)年まで約50年にわたり使用されました。建材には煉瓦が用いられ、当時、水道施設の先進地であったヨーロッパの凱旋門をイメージしたデザインが採用されました。また、直射日光をさえぎるた



図2 旧天王貯水池一般公開の様子

めに土を盛り上げるなど、水質の安全のための工夫が施されており、デザインと施工技術は建築的にきわめて価値が高いものです。堺における上水道の歴史の一端を知るうえで貴重な建造物です。また、けやき通りのランドマークにもなっており、旧天王貯水池の一般公開(図3)やライトアップ(図4)などを行って地域の活性化にも活用されています。

●歴史遺産の利活用

けやき通りの歴史遺産の存在を知らない地域の方に、それらが身近にあることに気づいてもらい、興味をもってもらうことが継承につながる第一歩となり、まちづくりの大きな力にもなります。本会では、旧天王貯水池の利活用として、アーティストを招いてのアートギャラリーや地域の幼稚園児・小学生・高校生・高齢者の4世代が参加するダンス・音楽祭等を毎年開催し、出演者を含め約2,500人の参加を得ています(図5)。また、他団体と協力しあった観桜会やお茶会を貯水池の周辺で開催しています。同じく登録有形文化財である旧三丘会館(図6)などで、建築家や神社の宮司、大学教授を講師に招き、周辺の歴史遺産についての勉強会を年に2~3回開催しています。こういったイベントや勉強会は地域の交流の場となり、地域周辺の活性化にもつながります。そして歴史遺産を身近なものとして感じ、歴史遺産に対する造詣を深めてもらうことにもつながっています。



図3 一般公開中の旧天王貯水池内部



図4 旧天王貯水池ライトアップ



図5 旧天王貯水池敷地内においてのイベント



図6 旧三丘会館

【活動上の課題と今後の展望】

本会は発足から大々的な会員の勧誘はしていなかったこともあり、設立当初からほぼ同じメンバーで活動しています。引退される方もいるため、会員数は減りつつあるため、現在はイベントの参加者に入会いただけるよう声をかけています。上記のイベントや勉強会は、地域密着型だからこそ開催できるものです。今後も本会が地域の文化財の保存活用を継続していけるよう新たな会員を獲得することが課題の一つです。また、旧天王貯水池は建設されてからまもなく100年になりますが、傷みが激しく天井からは雨漏りもみられます。今後は保存に向けた有効利活用を進めていきたいと考えています。今後「まちづくりはひとづくり」ということに目を向け、「ひとづくり」という新たな部門へと発展させていきたいと思ひます。